



童話 ベズワラガル

——レディ、グレゴリ原作——

津 田 芳 雄



五四

アイランドの或王様が、或時、侍従長をお連れになつて外を散歩してお出でになりました。そして一つの沼の所にお出になりました。するゝ沼には一羽の親鴨が十二羽の雛の一群を連れて泳いでゐました。そしてその親鴨が頻りに

「雛の一羽をその群から追ひ離さうとつゝ、いゝてゐました。王様はこれを御覧になつて「さうしてあんなことをするのだらう」と仰せになりました。侍従長は「十二羽子供があります時にはその中の一羽だけを家から追ひ出して、獨り立ちさせなければならぬのでございませう」と申しました。

「では余の子も十二人の中から誰か一人は城から出さなければならぬことになるが、誰を出したらよいものか、それはさうして決めるのぢやないか？」と王様は仰せになりました。「それはかうなされたらよいのでございませう。明日王子

様が學校からお歸りになる所を王様が御覧になつて、一番後にお歸りになつたお方をお城から出すことになされたらよいのでございませう」と侍従長が申しました。そこで王様は翌日侍従長とお二人で十二人の王子様が學校からお歸りになる所を番なされることになりました。するゝ一番末の王子様が一番後にお歸りになりました。父君の王様は「あゝ、もう一度やつてみさせて呉れ」と仰せになりました。それで又翌日お二人で番なされることになりました。するゝ日目も同じことでした。「あゝ、末の子を出すのは他の二人の子を出すより余はつらい」と王様は仰せになりました。侍従長は「それは御心配に及びませぬ。その王子様はお任せになられるのでございませうから」と申しました。「では余も

満足ぢや」ミ王様は申されました。

それから王様はその末の王子様をお召しになりました。十年も二十年もお困りにならん程な澤山なお金の入つた財布をお下しになつて、これからは獨り立ちで世間へ出てやつて行くのだぞ、ミ仰せになりました。

それから、その末の王子様は父君のお城にお別れをして、旅にお立ちになりました。そして晩まで或道をお歩きになりました。するさ前の方に一軒の小さい家があつて、その中から燈火が見えておりました。王子様は戸を開いて中に入りになるミ、中にはミても年取つたお爺さんが獨りゐるだけでした。そしてそのお爺さんが「これは王子様、ようこそお出でになりました」ミ云つて喜んで迎へて呉れました。王子様は「やあ、有難う、だが僕が王子だつてここはさうして分つたんですか」ミお訊ねになりました。するさお爺さんは戸の上に掛つてゐる刀を指して、かう申すのでした「あれを御覽下さい。その戸を潜つて来る人が若し王子様でない時には、あの刀がその人に落ちかゝつて来て、その人の首を刎ねるのでございます。この家は王子様だけをお迎へ

する所でございます。それにしても王子様は誠に好い時にお出でになりました。こんな好い時は又ミございませぬ」それはまたさういふわけですか」ミ若い王子様は申されしました。お爺さんは「それはミ申しますのは、この向ふに一つの池がございます。その池に一年の中に一朝だけベズワラガル姫ミ申すお姫様がお見えになるのでございます。姫は世界中で一番お綺麗な方です。そのお方がその朝、十二人の侍女達をお連れになつて、一緒にその池で泳がれるのでございます。そして明日が丁度その日に當つて居るのでございます」。お爺さんは王子様の方へ顔を寄せて尙續けて申しました「それで王子様は明日池にお出でになつて、姫や侍女達が水にお這入りになるまで隠れてお出でなさい。ベズワラガル姫は一番後に着物をお脱ぎになりますから、それまでお待ちになつて、それから王子様はそ一つお姫様のお着物を取つてお隠しになるのです。するさお姫様は何所へも行かれなくなつて、王子様のお願ひになることは何でもお聞き入れになるやうになります。さうしたらお姫様をおもらひ受けなさいまし」ミ申すのでした。

若い王子様はそれで、翌朝早く池の所にお出でになりました。するこべズワラガル姫が十二人の侍女達をお連れになつて水にお這入りになりました。そこで王子様は姫のお着物を取つてお隠しになりました。やがて侍女達は泳ぎ疲れてから、着物を着て、それから鳥に變つて飛んで行きました。べズワラガル姫だけにはそれがお出来になりません。

其處へ王子様が出て来て姫のお着物をお返しになりました。そして「僕には何を下さいますか」を仰有いました。姫は「お望みの物は何でも差上げます」を仰有いました。王子様は「他に何もお願ひはありませんが貴女を下さい。貴女に僕を結婚して、僕の妻になつて戴きたいのです」姫は「貴君は飛べないのに、さうして妾を連れてお出でになりますか」を申されました。けれどもさうは云ひ乍ら、姫の方で、お待ちになつてゐた鎖の環を王子様の首に掛けて、王子様の手を取つて、或庭へ連れて飛んでお出でになりました。そして其處の庭師の家に王子様を連れて行かれました。「そして一事、妾は貴君に申し上げて置かなければならないことがあります。それは、貴君が妾のこころを不思議に思つた

り、妾のこころを一言でも何きか仰有つたりしてはならない、さういふこころでございます」姫が申されました。「それは致しませんが」王子様は仰有いました。そして庭師の家に居られる王子様の所へ姫が毎日お食事をお持ちになつて、暫くの間は、かうして其處で御一緒にお暮しになりました。

(讀者諸君!!この話を物語つてゐる人は百歳の老人なんです。

この所で少し疲れてきたものですから、傍の老夫人が戸口の階段に腰を下してゐる。これもお年寄りの老婆にポータを一杯頼みます。老人はそれを一啜りして、それから又話を續けます)。

所がたうさう或日のこころ、庭で姫が王子様の側をお通りになつた時に、王子様はそのお美しい姿を御覧になつて、傍の庭師の方に向つて、かう仰有いました。「世界中に僕の妻程綺麗な婦人はこれまでにだつて一人もあるまい」するこ庭師が「それは左様でございます。がその奥様はもうあなたの側に居られなくなります」を申しました。

翌朝べズワラガル姫は王子様の朝のお食事をお持ちになつて、かう申されました。「まあ、貴君はさうして妾のこころ

をあんなこゝ仰有つたのですか。妾はもう貴君にお別れしてライナ・スルアへ参らなければなりません。もうお會ひ出来ません。王子様は「貴女のあんな美しいお姿を見て、さうして綺麗だと思はないでゐられませう。僕は何時までも貴君の後について行きます」を申されました。

それで姫は其處にゐなくなりました。が、その何處かへ行かれる前に、王子様の五本の指に五滴の蜜を残して行かれました。王子様も姫の後を追ふてその庭をお立ちになりました。

そして王子様はその日、一日中お歩きになつて、日の暮に一人の老人だけしかゐない一軒の家にお着きになりました。するゝその老人が「今日立つて行つた一連の人達を神様がお守り下さいますようにさういふお祈りを致しました。王子様は「それはさういふ人達です」を訊ねになりました。「ベズワラガル姫とその十二人の侍女達です」を老人は答へました。「それは僕が尋ねてゐる人です」を王子様は申されました。「あなたは姫にお會ひになることは出来ません。だが私が會はして差し上げませう。明日此處をお立ちになる

時に、球を一つ差し上げます。あなたはその球を前の方に投げ乍ら歩いてお出でなさい。あなたがその球について行くことが出来たら、私の弟の所にお着きになります。そしてたら弟がお力になつて差し上げませう」を老人が云つて呉れました。

それで王子様は朝飯を戴いてから球を老人からもらつて、それを前の方に投げてはその後を追つて一日中お歩き続けになりました。するゝ前の老人の弟さんの家に着きましたので、王子様はその家にお這入りになりました。するゝ老人が「今日立つて行つた一連の人達を神様がお守り下さいますよう——それはベズワラガル姫とその十二人の侍女達です」を申しました。「それは僕が尋ねて居る人です」を王子様は申されました。「あなたは姫にはお會ひになれません。ですが私が會はして差し上げませう。外の厩に馬が十二頭居ります。其處へお這入りになつて、厩の戸の裏側に掛つてゐる馬鞆ウマカマを取下して、それを振つて下さい。そこへ出て来て、自分でそれに首をはめる馬にお乗りになれば、その馬が姫の行かれた所へあなたをお連れします」を老人

が云つて呉れました。それで王子様は翌朝、朝飯を戴いてから厩に行つて、云はれた通りに致しましたら、小さいアラビヤ馬が走つて来て首を馬具にはめました。王子様は「何

てまづい馬が出て来たんだらう。あんなに良い馬が他に澤山ゐるのに」云仰有いました。老人は「これが充分お役に立ちます。さあお乗りなさい。あなたは乗馬はお上手ですか」。云申しました。王子様は「それは得意です」云云つてその馬にお乗りになりました。「さあ、あれを跳び越しなさい」云老人は云つて、その屋敷の横の高い塀のある方へ馬を向けました。「御申戯仰有つてゐます。あの塀を跳び越すなんて、誰に出来るのですか」王子様は仰有いました。けれどもその小さいアラビヤ馬は地面から離れました。そして空中に弓を描いて、それから塀の向ふ側に降りました。王子様はその途端に馬からお落ちになりましたが、起き上つて又その小馬にお跨りになりました。「さあ僕、出掛けます」云王子様は申されました。老人は「ベズワラガル姫の居られる所へはさても行かれますまい。其處へ行く途中には空へ向つて一哩程も火を噴いてゐる所があつて、其處を越

える時には、空を高く飛ぶ鳥さへ灰になつて落ちるので「云申しました。

それでも王子様はその子馬に乗つてお出掛けになりました。そして火を噴いて居る所が見える所までお出でになりました。するにその子馬が「私の耳に手を入れて、中の蠟を取り出して下さい。それに王子様の召し上る物に、私の戴く白水が入つて居ります」云申しました。それで王子様はその蠟を取り出して、白水を馬におやりになつて、それから残りを馬の蹄にお塗りになりました。するにさうでせう、そのお陰で馬が上空に高く一跳びして、火の噴いてゐる場所を越えて、その五哩も向ふ側に降りたのでした。そして馬の腹の毛が焼け落ちただけで怪我一つありませんでした。

そして、その降りた所に一軒の小さい家があつて、その中にお婆さんが一人居りました。王子様は馬はそのお婆さんになつて、七人の男が頭を半分切り落されたり、手や腕を無くしたりして家に這入つて來ました。「あの人達は誰です

か。そしてさうしたのですか」王子様がお訊ねになりました。「あれは皆妾の息子でございます。それが、七年の間毎晩、小船に乗つて来て、あの子達を戦争をして居る人達があるものですから、それであんなに怪我をして居るのでございます。そして相手の中であの子達に殺された人達は皆翌朝になるまで生返るのでございます。またあの子達も朝になるまでつかり元通りに癒つてしまひます」お婆さんが話しました。王子様は「では僕が行つてその相手の者を殺してやる」お仰有つて、小船の所にお出でになつて相手の者を皆追拂つてお終ひになりました

それから王子様はベズワラガル姫の居られる家から小半里を隔つてゐない家の所までお出でになりました。そして宿を乞はれます、その家の主人がかう申すのでした「さうしてあなたはこの家にお這入りになるのですか。さうして皆の行つてゐる所へ——あの結婚式のある向ふの大きな家にお出でにならんですか」それで王子様は料理人の着物をもらつて、それを着てベズワラガル姫のお家へお出でになりました。そこには何百人もいふ大勢の人達がベズワラ

ガル姫の結婚式に出るために這入つて居りました。王子様はその玄關の所へ行つて、「料理人はお要りではありませんか」お仰有いました。するに家の人達は「要りますとも要りませぬ、十人來て呉れたつて喜んで傭ひます」お申しました。

そして王子様はお臺所へ廻されました。それから王子様は料理人頭から麥粉やなんかケーキを拵へる材料をおもらひになつて、焼くだけに拵へ上げてから、その上に五本の指の型をつけて、それからそれを窯にお入れになりました。そして焼けた時にそのケーキに覆を被せて給仕人にかう云つてお渡しになりました。「このケーキはベズワラガル様に上げて下さい。他の方には上げはいけませんよ」。

それでそのケーキは食卓のベズワラガル姫の前に置かれました。姫はそれを少し食べようと思つて、手にお取りになつて、お割りになりました。そして少し召し上つてから「このケーキを拵へた人は何處にゐますか。何處にゐたつて構はないから妾の所へ直ぐ呼んで来て、おくれ」お仰せになりました。姫はケーキの中に入つてゐる五滴の蜜を御覽に

人のお年寄がゐて、ミても大きな板石の上にお城を築いて
ました。そしてそのお年寄が王子様に何處へ行くのです
かミ尋ねました。王子様は、黒森の女王から僕の妻を取返
しに行く所です、ミお答へになりました。するミお年寄が
「そんなごこの出来る人は誰もありません。このお城を一押
しで、板石から五ヤード位押し離す程の人であれば別だ
が」ミ申しました。それで王子様は早速それを試して御覽に
なりました。そして一押しなされるミ、お城が八ヤード程
板石から離れました。お年寄はそれを見て驚かれました「や
あ、あなたはわしの妹の子ぢやな。妹の子の他ほかには世
界中にその出来る人は誰も無いんだから」かう云つて、お
年寄は王子様を抱いてキッスをされました。それから王子
様に言付けて板石を動かさせになりますミ、その下に剣が
ありました。「その剣を持ちなさい」。そして左右に振りな
さい。さうするミ、そのあなたが剣を振る度に黒森の女王
の力が無くなつて行くのぢや。そしたらあなたは、女王が
すつかり弱つてしまつてから行つたらい、ミお年寄が申
されました。

それで王子様は叔父様の仰せ通りになさいました。そし
て王子様が黒森の女王の所にお着きになつた時には、もう
女王はその首をちよいと刻ねるだけでいゝやうになつてゐ
ました。

それから王子様はベズワラガル姫を森からお連れ出しに
なつて、お二人は御無事に前のお庭にお歸りになりました。

「ベズワラガルといふ名前に何か意味があるでせうか」。

「いや、別に何も意味はありません。それは始めから姫のお持
ちになつてゐたお名前で、これからも何時までもお持ちにな
るお名前でせう」。

こんな會話が戸口の階段に腰を下して聽いてゐた老婆と話し
手の百歳の老人との間に交されました。傍の老夫人はその間
話を聞き乍ら眠つてゐました。

をばり